
IS インフィニット・ストラトス 季節の廻る場所

椿牡丹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 季節の廻る場所

【Nコード】

N7237Y

【作者名】

椿牡丹

【あらすじ】

IS。

正式名称、インフィニット・ストラトス。女性にしか扱うことのできない兵器だ。この兵器の登場により、世界はその姿をがらりと変えていた。

そんな時、一人の男子学生がISを起動させる。

『世界で唯一ISを使える男』には彼を取り巻く問題、そして次々と襲いかかる様々な困難が待っていた。

だがこの時、実はもう一人同じ受験会場に足を踏み入れている少女の姿があった。

これは本来ならば当たり前のように生き、当たり前のように死ぬはずだった少女が、その道行きを歪められていく物語。

ブローグ

インフィニット・ストラトス。

元々は宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツだ。しかしながら宇宙開発は一向に進まず、結果スペックを持てあました機械は『兵器』へと変わり、今となつては各国の思惑により『スポーツ』へと姿を変えて落ち着いている。

そんな『インフィニット・ストラトス』、通称『IS』には様々なものがある、がたった一つ共通する事柄があつた。

それは『女にしか使えない』という致命的な欠陥だ。

「ここどこだ？」

市立施設の多目的ホール。その中を一人の少年が歩いている。

季節は冬。二月の真ん中であり、学生にとっては受験シーズンの真っ只中である。そんな時期に少年が何をしているのかといえば、もちろん受験をするための会場へと向かっているのだ。

ただし彼の足取りは不確かなもので、あっちに行つては戻り、こっちに行つては戻り、とただ歩いているだけのようにも見えないことはない。が、あたらずと雖も遠からず。

（これって迷つたんじゃ……いや、中学三年にもなつて迷子は恥ずかしすぎる）

初めて来た受験会場で完全に迷子になっていた。

「とりあえず次に見つけたドアを開けるぞ。うん、それで何とかするはずだ」

半ばやけくそとも捉えられるようなこの行為。

この行為が後の彼の人生を大きく変えてしまうことに、まだ彼は気付いていなかった。

そして『世界で唯一ISを使える男』の誕生とほぼ同時刻。

「うわぁーん！！　ここどこなのー！？」

一人の女子生徒が道に迷っていた。

茶色を帯びたセミロングの黒髪に赤いカチューシャ。右側だけを三つ編みにするという個性的な髪型の少女だ。案内図と格闘しているものの、思ったような成果は挙げられていない。

先程の少年の迷い方が可愛く見えてしまう。なにせ彼女、既にこの多目的ホールについて一時間が経とうとしているのだ。

両親から「遅れるといけないからもう行きなさい」と言われた事もあり早めに家を出て、こうして指定された受験会場までやって来たのだが……。

両親のその心配は現実のものとなる。

いくら多目的ホールといえど一時間も彷徨えば中を一通り見て回る

事が可能だろう。しかしこの彼女、まるっきり周りのことを見ていなかった。

（早く行かなきゃ受験に遅れちゃうー!!）

その事ばかりが専行してしまい肝心の『探す』という行為が疎かになっているのだ。

これでは見つかるものも見つからない。

「その学生、何をやっている!!」

「っ!!」

不意に後ろからかかる声。

悪いことなど何もしていない。ただ道に迷っているだけなのだが、その威厳のある声に思わず謝ってしまいそうになる。

振り返ると少女よりの頭一つ分大きな身長的女性がこちらに向かって歩いてくる。

黒い!!

女生徒は喉まで出かった言葉を何とか飲み込む。

初対面な上に相手は大人だ。それに思ったことをそのまま口にしても許してくれるような優しさは外見からは感じられない。

整った容姿、後ろで束ねられた艶のある黒い髪、すらりと長い身長、スーツ・ネクタイ・ヒールと全てが黒で統一されているからだろうか、さらにシャープに感じられる。

「あの私、道に迷ってしまいました」

「……ちなみに聞くが、左手で持っているそれは何だ？」

「えっ！？ コンパスですけど」

「右手で持っているものは何だ？」

「ここの案内図です。でもどうしてもここに辿り着けなくて……」

沈黙が流れる。

葉書に描かれている図の一ヶ所を指し示しながら固まる少女。

そんな彼女を見て歎息する女性。

見つからないのも当然だ。

一時間近く彷徨った結果、彼女は目的地の真逆に位置へと移動していたのだ。

「すぐそこを右に曲がってしばらく廊下を進むと扉がある。そこが試験会場だ」

「そうなんですか！！ ありがとうございます！！」

「ここは四時までしか借りていないからな。少し急いだ方がいい」

「はい！！」

案内図を見ることなく告げる女性の言葉に少女は大きく頷いた。再度案内図を確認し、コンパスを確認すると少女は勢いよく走り出し。

左に曲がった。

「おい！！　ちょっと待て。お前は私の言うことを聞いていたのか？」

「えっ！？」

「もういい、面倒だ。ついて来い」

女性の言っている事が分からないのか、少女は首を傾げるも大人しく後ろについて行く。

ついて行くだけでもかかわらず未だコンパスと格闘しているところを見ると、自力で行きたいのかもしれない。そんな事を考えながら女性は問う。

「名前は？」

「えっ！？　ああ、名前ですね。秋穂です」

えっと、と言いよどむ少女　秋穂の考えが分かるのか、自分から振った話であるために予想がついていたのか、女性は足を止めることなく言い放つ。

「私は織斑千冬だ」

自己紹介でも歩みは止めない。

が、続けるように言った秋穂の言葉に千冬は足を止めてしまう。

「千冬さんですか。綺麗な名前ですね」

「……………」

「あ、あの私なにか悪いことを」

「いや、何でもない。　ほら、着いたぞ」

「ほんとだ！！　ありがとうございました！！」

頭を下げる秋穂の表情は、あどけない少女そのもの。満面の笑みを浮かべながら扉を開け足を踏み入れる。

そんな秋穂の行った先　扉を見つめ続けているのは先程まで一緒にいた千冬だ。その凜々しい表情は変わらない、が彼女を良く知るものがここにいたならば、口元が微かに上がっていることに気付けただろう。

「単に知らないだけか、あるいは」

最後まで言い切ることなく、足音を残して姿を消した。

第零話：それぞれの始まり

「無理矢理だったな……」

世界で唯一ISを使える男 織斑一夏はベッドの上で天井を眺めていた。

あの日 一夏がISを起動させ、世界で唯一ISを使える男が誕生した日から一夏は日本政府に保護されている。

が、実際は保護という名の下で監視されている状態である。
IS学園に入学となれば、全寮制である上に滅多に外には出ることが出来なくなってしまう。今この時間は、一夏にとっても重要なものだった。

にもかかわらず、一夏がベッドから起きて何をするかと言えば。

家の掃除だった。

「明日ゴミの日だしな」

慣れた手つきでできばきと部屋の中を片付けていく一夏。
その様子は仕方がなくというものではなく、むしろ掃除を楽しんでいる風にも見える。

「ふう……。とりあえずこんなもんか」

昼頃から始めたにもかかわらず、外を見ると既に真っ暗となっている。

これから春へと季節が変わるとはいえ、今はまだ冬と変わらない。

窓から入ってくる風は、昼ならば日差しも出ていたために心地よかったが、掃除が終わり一息つくとも涼しさを越えた寒さがやってくる。

「うう……まだ寒いな」

窓を閉め、風に当てられた体を震わせる一夏は、まとめたゴミ袋をきつく縛り、ゴミ捨て場まで持っていく。

この時捨てたゴミの中に、古い電話帳だと思っていた物が入っていることに気が付いたのはそれから一週間後のことだった。

「へえー。ISにも色々あるんだー」

とある一室。

ぬいぐるみからキーホルダー、人形にいたるまで様々な種類の『可愛いもの』で埋め尽くされた部屋の中、一人の少女がベッドで寝転がりながら分厚い参考書に目を通していた。

IS学園　IS操縦者を育成するための学校　への入学が決まった新入生に送られるISに関する基礎知識等が書かれた参考書だ。その参考書、大きさ・分厚さもさることながら書かれている文字が小さい。

見る者が見れば、なにか別のものと見間違えてしまうかもしれない

代物だ。

「あれ？」

そんな参考書をゆつくりと、だが確実に読み進めていく少女だが、ふとあるページでその手が止まってしまう。

そのページの内容は『モンド・グロッソ』。三年に一度行なわれるISの世界大会だ。今現在『スポーツ』として落ち着いているISだが、それは建前でしかない。

ミサイルなどただの兵器では相手にならない。故に、ISにはISでしか対抗できない。それはつまり『ISの性能の高さ＝軍事力』となるのだ。

だが、少女が手を止めた理由はそこではない。もっと単純で、そこに写った一枚の顔写真に見覚えがあったからだ。

「やっぱり千冬さん、IS学園の関……け、い……」

最後まで言葉にならない。どころか明らかに少女の顔が青ざめていく。

顔の筋肉はひくつき、参考書を持つ手は震えている。

『モンド・グロッソ第一回大会優勝者 織斑千冬』

それは千冬が世界最強であることを示すものだった。

「嘘……千冬さん、優勝者なの？ ってことは世界一！？」

IS学園、職員室。

IS操縦者を育成するための学校であるがゆえに、その教員ともなると仕事の量は膨大なものになる。

「今年の生徒はすごいですね」

「そうだな」

「イギリスの代表候補生に篠ノ之博士の妹さん、それになんとと言っても織斑先生の弟さんがいますからね」

話しているのは千冬ともう一人、眼鏡をかけた女性教員だ。

一枚一枚の資料を丁寧に、手早く読み取り片付けていく。女性教員の仕事は決して遅いわけではない。が、隣で座っている千冬の仕事振りを見れば誰もが息を飲んでしまうだろう。

「あいつのことは置いておくとして……もう一人、面白そうな奴がいる」

ふと手を止めた千冬の目に止まる一枚の資料。

その表情から、資料を受け取った女性教員もどれだけ千冬がその生徒を目に留めているかを知る。

「へえ、IS適性は……Aですか。将来有望ですね」

「ランクなど今の段階ではほとんど意味がない。そういう意味では周りとは大差ないな」

「えっ！？ ま、待ってください。えっと……名前は……」

立ち上がり、部屋を出て行く千冬。それに続くようにして女性教員も慌てて職員室を後にする。

資料には、右側だけを三つ編みにするという個性的な髪型をした女子生徒の顔写真が貼られていた。

茶色を帯びた黒髪に黄色いカチューシャを着けている。

そこに記されていた名前を女性教員は忘れまいと強く印象づける。千冬が目をつけるような生徒だ。おそらく何か特別なものを持っているのだろう。

「えっと……かすがあきほ春日秋穂さん、ですね」

第零話：それぞれの始まり（後書き）

本格的に始めましたISでございます。

あまり後書きというものは得意ではありません。が、そうも言っていられません。

主人公の軽い紹介でもしておきたいと思います。

まず名前ですが……。

ぶっちゃけて言いますと適当です。

一夏。千冬。 夏と冬。 春と秋がないじゃん！！ どっちかつきたいな～。 もう両方つけちゃえ！！

とこのような流れでつきました。

ちなみに春と秋を逆転させた『秋原春花』とか春花を春香にするかとか色々考えたんですが……。

春日が異様に私の中ではまりました。
もうこれしかない！！と思いました。

ちなみに『秋穂』以外に名前も思い付きませんでした。
こっちは語彙力の問題です。

まあこんな感じで出来上がりしました小説でございます。
余計なことはバンバンしていきたいです！！

これからよろしく願います

第一話：入学式と再会

入学式。

それは新たな出会いの場であり、学生にとっては、これから始まるであろう学生生活の第一歩として大切な一日となることは言うまでもない。

それはどこの学校であろうとも同じである。

たとえ女子生徒の中にただ一人男子生徒が混ざっていようと変わらないことは変わらないのだ。

（はぁ……。これから大変だな。絶対……）

教室中央の一番前。そこが織斑一夏の座席だった。

突き刺さるような女子生徒の視線。かつて味わったことのない緊張感を感じながら一夏は一人黙ったまま椅子に腰掛けていた。唯一の救いが幼馴染である女子生徒　篠ノ之箒がこのIS学園に入学しており、クラスまで同じことなのだが……。

「……………」

肝心の箒はというと一夏の事を覚えていないのか、はたまたわざとそうしているのか、全く声をかけてこようとしない。

だが、今は担任の教員をクラスで待機して待つ時間である。立ち歩いているような生徒は一人もいない。男子生徒がまともにいればこんな空気にもなっていないのだから、残念な事に男子は一夏一人

である。

これを中学時代の親友である五反田弾に　一夏としては本当に真面目に　相談したのだが、

『なんだなんだ！？　ハーレムルートまっしぐらだったのに不満があるっていつのか！？　おいおい、随分といいご身分ですねー。さぞかし楽しいんでしょうねー。お前一回死ねばいいんじゃない？』
という答えになっていない答え、もといただの悪口を言われるだけの時間になってしまった。

「……………」

そんなわけで、大した心の準備も出来ぬままに入学式を迎えてしま
いまともに周りの生徒と交流をすることもなく今に至っている。

弾の言うようなおいしい展開には全くなっていない。どころか、一
夏は今日この日に向かって未だにまともな言葉を発していなかった。

「遅れてすみません」

突き刺さる視線に必死に耐え、　気まずい雰囲気の中で過ごす一夏の
心に一筋の光が差す。

今までどこに行っていたのかは知らないが、遅れていた担任の教員
が教室にやってきたのである。

急いで教壇に立つ女性教師。制服を着ていないためにこの人が担任、
なのかどうかは分らないが、少なくとも教師であることに間違いな
い。そして今までずっとこの瞬間を待っていた一夏である。嬉しく
ないはずがない。

が、瞬間的に一夏の頭からそれらのこと全てが消え去った。

一夏の座席は先に説明した通り中央の一番前だ。教壇に立つ教師からは一番近い距離に位置する。

「……………」

今までもずっと無言だったのだが、それとはまた別の理由で一夏は無言になってしまっていた。

視界を占めているのは目の前に広がっている神秘ともとれる光景。未だかつて一夏が見たことのないものだった。

「一年一組副担任の山田真耶です。皆さんよろしくお願いします」

名前以外にも色々と言っているが、名前以外の情報はほとんど入ってこない。緑色の髪。身長が小柄に見えるせいか眼鏡がよく似合っている。そして一番の特徴。一夏の目が離れないものがその下にあった。

（で、でかい……）

小柄に似合わない豊満な胸部から目が離せなくなっていたのである。何が凄いのかといえばそのボリュームである。女性経験はないものの、男子校に通っていたわけではない。中学には当然ながら女子生徒もいた。その中にも異常に発達している生徒がいいることはなかったが……正直話にならない。

女性の胸とはこれほどまでに揺れるものなのかと、ある種の感動さえ覚えてしまっていたのだ。

目が離せない。じろじろと見るなど失礼極まりない行為であり、ましてやそれに感動するなど言語道断だ。

相手は教師であり、すなわちこれから自分はこの教師の授業を何度となく受けるはずだ。そんな中で『先生の胸が気になって集中できません』などということになってしまいかけない。

「むらくん」

というより現在進行形でそうなってしまうている。

駄目だ、駄目なんだ！！ 教師をいかがわしい目で見るなんて……。

と頭では分っているものの、体が言うことを聞かない。まるで呪縛にかかったかのように、真耶の胸を目で追いつづける。

「織斑君！！」

「えっ！？ あっ、はい！？ なんですか！？」

「えっと今自己紹介してるんだけど『お』まで終わって次が織斑君なの。だからその……怒らないで」

真耶の一言で我に返る一夏。今までの自分の行いを反省するとともに、脳に刻み込んでいた映像を抹消していく。徐々に涙目になっていく真耶に慌てて謝り勢いよく立ち上がる。

入学式始まって以来最初の、そしてもしかすれば最後になってしまいかもしれない『男性』の自己紹介の始まりだ。

秋穂は前を向いたまま一人の生徒を観察していた。否、おそらく一組の生徒はその生徒を除いて同じ事をしているはずだ。この雰囲気の中で後ろを振り向く勇氣はない秋穂だがその確信があった。

相手はもちろん『世界で唯一ISを使える男』織斑一夏である。

好奇、恐怖、動揺など生徒の心にあるものは全て異なっていたが、その中でも秋穂のものは他の誰も抱いていないことだった。

(……どっかで見たことあるような気がするんだけどなあ)

茶色を帯びたセミロングの髪には青のカチューシャが着けられその仕事を無言で行っている。右側だけの三つ編みを指で絡めながら必死に記憶を辿っていく秋穂だが、その答えにはたどり着いていない。

そもそも一夏がISを起動させここIS学園に入学してくることは以前よりニュースで全世界の人間が知っていた。

『女尊男卑』などと一部では言われている今のこの世の中、彼の存在は世界で唯一女性と対等な立場にいるのだ。

大々的に放映され、今や彼の名前を知らぬ者はいないだろうとされるほどだ。

だが、いや、だからこそ言うべきだろう。秋穂はその顔に見覚えがあるような気がしてならなかった。

ニュースで初めて見るのではなく、確かに感じた懐かしさを簡単に捨てられずにいたのだ。しかしこうして直接彼の姿を見ても何も思

い出すことはない。

懐かしいと感じる以上、彼との間に何かしらの関係があるはずなのだが……。その様な経験はしたことがない。

「うーん……何でだろ……」

思わず漏れてしまった言葉にさつと辺りに目を配る。幸いなことに全員の視線が彼に集まっているために秋穂の声を聞いた者はいなかった。

はあ、と一息ついた秋穂はその視線を一夏から横へずらす。

篠ノ之箒。このクラスにおいて唯一と言っていい。一夏のことを見ていない生徒だ。黙ったまま前を向いているため、秋穂からその表情は伺えない。
だが。

（なんだがわざとらしいんだよねー。『見てない』というよりは『見れない』って感じかな？）

なんにしても。と秋穂は心の中で思う。

一夏との関係があらうとなかろうと、所詮その程度のものでしかないということだ。

大切な思い出を忘れることはないだろう。

（篠ノ之さん覚えてくれてるかな？）

一夏の事は一先ず置いておくとしても箒の事はそうはいかない。本

当に短い間の事で、向こうにとっては何でもないことなのかもしれない。

それでも、自分が覚えている。

あの日、あの場所で。

彼女が差し出してくれた手を。

彼女がかけてくれた言葉を。

許してほしい。俺はそんな凄い人間じゃないんだ。女子に突き刺さるように見られる中でペラペラと話せる人間じゃないんだ。

「織斑一夏です」

急に当てられさっきまでの映像を振り払った俺に言えたのは、自分の名前だけだった。

気の効いた台詞なんて全く出てこない。

ああ、何だよこの沈黙。『もっと話せ』なんだがそんな風に聞こえてくる。いや、誰も話してないんだけどさ……圧力って言うか、無言だからこそその威力があるというか。

パシーンッ!!

「痛いっ!!」

「お前はもうちょっとましな挨拶ができないのか」

不意に頭に感じた強烈な痛み。

た、確かに俺の挨拶は酷かったかもしれないけど……って。えっ!?

「ち、千冬姉……」

パシーンッ!!

「織斑先生だ」

「だから痛」

パシーンッ!!

「……すみません、織斑先生」

「分かればいい」

問答無用の実力行使。暴力による圧政。傍若無人の四文字が俺の知るなかで最も当てはまる人間。そして、俺のたった一人の家族。

織斑千冬がそこには立っていた。

パシーンッ!!

「お前、何か失礼なことを考えていたな?」

くそっ……ばれてる。何でだか俺の考えてることってばれるんだよな。

こうなったら仕方がない。何とか切り抜けるためにも……正直に言おう。

決して後ではれた時が怖いわけじゃない。断じて違う。

「すみません。傍若無人だと
パシーンッ!!」

「ずいぶんと正直だな。このくらいで許してやる」

許してやるって……千冬姉、世間ではそれを許したって言わないんだよ？

立派な社会人なんだから知ってるよね？

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

やっぱり傍若無人じゃないですか。
なんてことは口が裂けても言えない。さっき言ってこれだったんだ。本気で殴られたらたぶん頭を潰される。比喻表現ではなくて、わりとマジで。

はあ……。一言言ってくればいいのに。俺がどれだけ心配したと思っ
パシーンッ!!

「織斑、早く席に着け」

「……はい。織斑先生」

うわー。痛そう……。

ここに来て初めて千冬さんを見た今、思った事はそれだけだった。だって織斑君本気で痛がつてるし、なんだかちよつと涙目な気もするんだけど。

初めて会った時に「黒い!!」なんて言わなくてよかった。言ったら私、今頃どうなってるんツ!!

「春日、なにか言いたいようだな。言ってみろ」

「……すみません。何でもないです」

うう……。何で？ これ痛い。凄く痛いよ。絶対駄目だって。一発で脳細胞五千個ぐらい死んでそうなんだけど。

織斑先生、もとい千冬さんが話し始めたせいか、周りの所謂『黄色い声援』は一応影を潜めている。織斑君はもちろんの事、私まで何故か受ける破目になってしまったあの出席簿アタック（私命名）。尋常じゃない痛さだった。それはもう、石で出来てるのかと思ってしまふくらい。

そんな光景を見た後だから皆怖がってしまっているんだと思う。まあさつき見たあの様子だと、怒りたいからわざと余計なことを……なんて生徒がいらないとも限らない。

千冬さん、凄い人気だったし。ってというか千冬さんの事知らなかつ

たの私だけだったみたい。入学前の参考書を頑張って読んでおいてよかった。何度捨ててやろうかと思ったか数えていないけれど、捨てなくてよかった。

この空気の中で『千冬さんってどんな人？』なんて質問をすると多分怒られる。か知っていることを何から何まで全部話してきそうだ。お喋りは嫌いじゃないし寧ろ好きなんだけど、さすがに千冬さんのことだけで何時間も話をしたくない。

それは千冬さんが嫌いだからじゃなくて、私が話すことがないからでも。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

こんな事を平然と言う千冬さん、なんだか素敵だしこうしていると何時間でもいい。私が話せなくてもいい。千冬さんの事がもっと知りたい。

もっともっと知って近づきたい。

少しだけ、そんな風に思った。

IS学園は日本にあるここの一校である。それはつまりIS操縦者を

育成する学校が一つしかないことを意味し、結果何が起こるかという。

（……授業、分ないよお）

入学初日、一時間目からの普通授業である。

秋穂は一限終了のチャイムが鳴ったと同時に机に突っ伏した。理由は単純。授業が難しいのだ。

机に頭を預けた状態で周りを見渡してみるが、秋穂と同じ状況の者はあまりいない。ともすれば、『意外と簡単だったね』などという戯言が聞こえてくる。

「はあ……」

大きなため息をつくも、その状況が変わることはない。大きく変化した事といえば授業が終わり休み時間になったことで我先にと一年一組に大人数が詰め寄せていることだろう。

直接自分には関係のないことだが、そんな光景を見ながらそれでも秋穂は思ってしまう。

（こんなところに男子一人だなんて、大変だねえー。まっ、でも男子にとつては嬉しいことか）

普通の公立中学に通っていた秋穂である。他の生徒よりも圧倒的に男子に対する耐性があった。そんな彼女が思うことはあまり心配した様子ではないが、周りの『あんた話しかけなさいよ』なんていう言葉を聞いているとこのままではあの男子生徒は一人ぼっちになっってしまうのではないか。一人でいることに恥ずかしさを感じ、結果、屋上から身投げするのではないか。と様々な妄想が膨らんでいく。

そうでなくても。

便所飯。

そのワードが頭の中に一際大きく現れ、自身がそうなってしまわな
いかと身震いさせてしまう。

「っと、こうしてる場合じゃない。篠ノ之さんに挨拶行かないと……」

大切なことを思い出し、頭を上げて立ち上がろうとする。
がそこで前方から声が聞こえてきた。今まで音の聞こえることがな
かった一夏の席の方からである。

「……ちよつといいか」

あまりの驚きで秋穂はそちらの方向に顔を向けた。一夏が気になる、
というのはもちろん理由の一つである。ニュースで見て、直に見て、
覚えがないにもかかわらず一種の懐かしさを感じさせる少年。気に
ならないわけがなかった。

がそれはそれとして、もう一つ。こちらの方が本命だ。

つまり『誰が先陣をきったのか』ということに多大なる興味がわい
たのだ。

別に悪いことではない。一夏IS学園の生徒であり、自分たちもま
た同じ学校の生徒なのだ。交流を持つことなどいたって普通のこと
だろう。

だが、相手が男子となれば女子生徒にとっては例外である。

まずもってどのように接していいか分からない。

ISは一夏を除けば女性にしか反応しない。ゆえにISのことを学ぶ生徒及びIS学園に通っている生徒のほとんどが女子校出身なのだ。

そんなわけであるからして、男子生徒に話しかけられる人物がいたこと驚きだった。

（つて、篠ノ之さん！？）

「廊下でいいか？」

会話の細部までは聞こえないものの、どうやら箒が一夏に声をかけたらしいことは周りの雰囲気から察することが出来た。先導していく箒、慌てて後についていく一夏。箒の顔つきが険しいせいか、その場にいた生徒が左右に広がり道を空ける。

（凄い……モーゼの海渡りだ）

そんなくだらない事を考えた秋穂だが、その後ろ姿にまたしても懐かしさを感じた。

今回は漠然とした予感ではなく、はっきりとした記憶として。

「あーっ！ー！」

その叫び声にほとんどの者が反応する。一夏と箒のやり取りを見ようとしていたのだ、後ろからの突然の叫びに驚かないはずがない。

（そうだ。そうだよ。織斑君じゃない。何で忘れてたんだろ　）

あまりの叫びに皆が反応したが肝心の秋穂はというと周りのことなど全く見ておらず自分の世界に浸っている。

なぜ忘れていたのか。理由はたくさんあるだろう。だが、仕方がないといえば仕方がない。恋する乙女は一直線であり、周りのことなど気にしていられないのだ。

手を組み、頬をピンク色に染め、にやけた顔で、秋穂は叫んでいた。

「弾さんの親友じゃない！！」

第一話：入学式と再会（後書き）

第一話です。

秋穂ちゃんはなかなか鋭い子だったりします。

まあずばりの時もありますけど、たまたまのことが多いです。

そんなこんなでまたしてもマサムネ先生との会話です。

牡丹「どうしよう……早くも一夏が変態になってる」

マサムネ「ん？ 別にいいだろ。もっとやれwww」

牡丹「……ラジャ」

こんな感じで結構ぐだぐだやってます。

次回はようやくセシリアちゃん登場です。傲慢な金髪ドリ……ごほんっ、可愛いお嬢様になるように頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7237y/>

I S インフィニット・ストラトス 季節の廻る場所

2011年11月24日13時48分発行